

1枚の写真

2007年頃、ベトナム中部のとある村で、在来知と地域資源を活用し、暮らしの向上と資源・生態環境の保全、自然災害への対処力の強化を目指すという少々欲張りなプロジェクトに取り組みました。

ある日、村の年配のお母さん方の訪問を受けました。「伝統的織物(ゼン)を復活したいのだけど…」彼女らの少女時代にはベトナム戦争(現地では対アメリカ戦争と呼ぶ)があり、そのあいだ国境を越えたラオス側に疎開していたそうです。この戦争では、自分の意思とは無関係に、そして理不尽に、多くの命が奪われました。故郷の森は、枯葉剤や焼夷弾により消えました。1975年の戦争終結後に山間部の故郷に戻ったものの、国の森林保護政策により新たな土地へと再移住させられました。それまでは山間部での焼畑や水牛の林間放牧をしていましたが、慣れない水田耕作や畑作へと生業の転換なりわいを余儀なくされたのです。村の誰もが日々の暮らしに精いっぱい、若いころのお母さん方は伝統的織物の織り方を学ぶ機会がありませんでした。

気が付くと、自身の娘さんが年頃になっていました。少数民族の女性にとって、ゼンを織ることは必要な嗜みの1つでした。このままでは、

織り方を教えることができない。何とか手助けをしてくれないかと言います。私からの「どうすればいい?」という問いに、「織物に使う糸だけ寄付して。村には織り方を教えてくれるお婆さんが1人いるし、道具は竹細工が得意なお爺さんが持ってきてくれる。織物教室は自分たちで運営するから。」とのこと。それから始まった取り組みにより、1年後には、10人ほどの織り手が生まれました。互いに教えあい、今では、30人余りの織り手がいます。村ではその布でつくった野良着をよく目にするようになりました。ちょっと誇らしげでもあります。

写真①は、織物をするお母さんとこどもの姿です。この子は、日常のなかで、教わることもなく

125



写真①伝統的織物(ゼン)を織るお母さんと子ども
(提供: 飯塚明子さん)

織り方を学ぶでしょう。これは、繰り返される日常を通じての文化の継承です。交わされる笑顔に、幸せの風景が見えてくるようです。一方で、かつて戦乱に蹂躪された土地や人びとの人生を想うことがあります。経済発展が続く現在、暮らしのために日々失われてゆく植物や動物や水や土を想うことも。

それに寄せて「誰のために、何を、どうするか」を考えます。「研究」と呼ばれなくても構わないから、この母娘のような笑顔をたくさん創り出す仕事をするのが私の夢です。私にとって、この1枚の写真は、アフリカやアジアでのフィールド研究の道しるべなのです。

田中樹



写真②伝統なつくりのコミュニティハウスで織物をするお母さんたち